

国際交流基金助成事業報告書

薬学研究科 薬学専攻
博士課程 3年次生
川上 智也

1. はじめに

本学国際交流基金の助成を受け、平成 29 年 12 月 2 日（土）から 12 月 7 日（木）にかけて、アメリカのフィラデルフィアで開催された American Society for Cell Biology (ASCB) and the European Molecular Biology Organization (EMBO) 2017 meeting に参加し、12 月 3 日（日）には自身の研究内容に関するポスター発表を行いましたので、ここに報告します。

2. ASCB/EMBO meeting について

ASCB（米国細胞生物学会）は毎年、アメリカ合衆国において国際会議を開いており、今回はフィラデルフィアで開催されました（年によってアメリカ西海岸と東海岸で開催場所が違い、去年はサンフランシスコで行われました）。また、今回は EMBO（欧州分子生物学機構）との合同会議でした。本国際会議は、参加者数が 10,000 人近い大きな規模の学会です。発表されている内容には、基礎的な細胞生物学の研究に関するものに加え、超解像度の顕微鏡を用いた新しい技術や疾患遺伝子・タンパク質の網羅的発現解析による研究など、新しい技術に関する発表も多くありました。

3. フィラデルフィアについて

アメリカ合衆国ペンシルベニア州南東部にあるフィラデルフィアは、人口約 150 万人の全米第 5 位の都市です。また、独立記念館や自由の鐘があり、アメリカ合衆国建国のゆかりの地となっています。さらに、名門のペンシルベニア大学やドレクセル大学、テンプル大学などがある学術都市であり、美術館や博物館も多く、映画ロッキーの舞台にもなったフィラデルフィア美術館もあることから、国内・外から多くの観光客が訪れる都市でもあります。



フィラデルフィア
シティーホール（高さ 166 m）

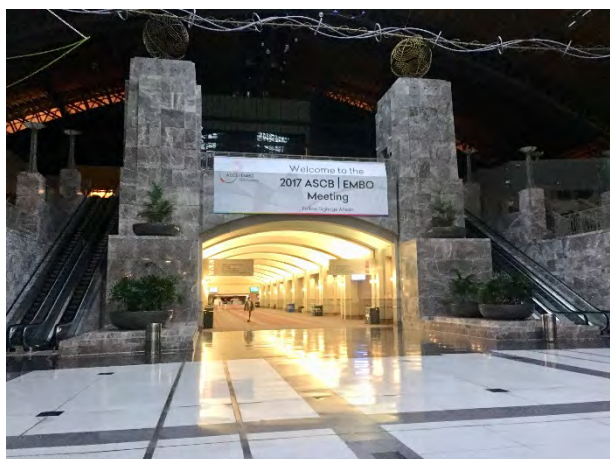


フィラデルフィア図書館

4. ASCB/EMBO 2017 meetingに参加して

私の発表は学会2日目の午後にありました。ポスターの前に90分間立ち、その間に説明をしたり質問に答えたりする形式でした。私の発表を聞きに来られた方は、アジアの方から欧州の方、アメリカの方など、様々でした。アジアの方とのディスカッションは、英語も聞き取りやすく、私が言いたいことも伝わっている様子でよかったのですが、ネイティブの方の英語は何度も聞きなおしてやっと質問の意図がわかる程度だったので、理解が大変でした。発表の90分間はあっという間に感じましたが、すべて英語で説明・議論しなければならない難しさをすごく実感することができました。

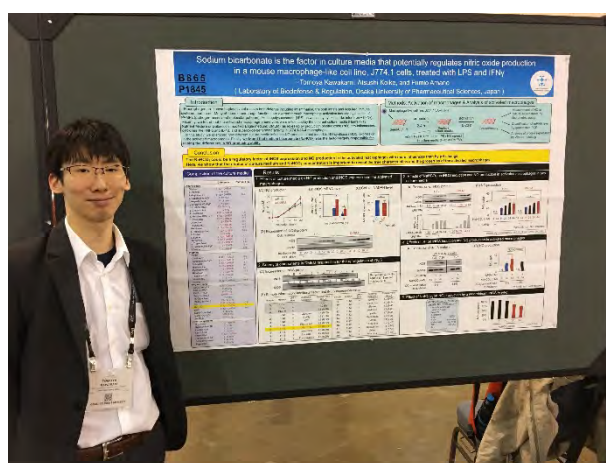
発表が終わってからは、他の研究者のポスター発表や口頭発表を聞きましたが、ここでも演者が英語ネイティブの方のときは、ほとんど英語についていけませんでしたが、それでも、要点を伝える場面では、強調してゆっくり話していることも多く、発表の内容だけでなく、プレゼンのやり方の勉強にもなりました。また、学会によっても違うと思いますが、ポスター発表の時間には軽食が出ており、皆フィラデルフィア名物のプレッツェルを食べ歩きながら会場を歩いたりポスターを見ていたり、これまで参加した日本の学会では想像できない自由さがありました。一方で、会場の入り口のセキュリティチェックは凄く厳しく、警備の方の人数も多くてびっくりしました。



学会会場（ペンシルベニア
コンベンションセンター）①



学会会場（ペンシルベニア
コンベンションセンター）②



発表したポスターと私

5. おわりに

今回、この渡航をするにあたり、多くの不安と心配がありました。というのも、私にとって今回が初めての海外旅行であり、さらに、1人でのアメリカ開催の国際会議への参加だったからです。入国審査やアメリカ国内線への乗り継ぎ、ホテルのチェックイン、公共交通機関での移動など、経験したことがないことばかりで、日本との違いにも驚きました。また、学会の準備はもちろん、英語の勉強にも多くの時間を費やし、対策を行いました。アメリカに着いてからは英語で苦勞する場面も多々ありました。学会会場で日本の大学院生参加者と日本語で話す機会も一度ありましたが、渡航の間は英語だけの世界であり、街中にも多くの人種が溢れかえっており、ホームレスに追いかけることもあったため、怖く感じることもありました。しかし、学会の空いている時間に、街中を歩いたり、フィラデルフィアにある美術館に、2つ行ったりすることができ、アメリカの文化にも少しは触れることができました。

国際学会の参加にあたって、大学院生の中に経験しておきたかったことの1つであったので、多くの学びを得ることができました。英語でのやり取りだけでなく、発表や質疑応答の雰囲気も日本とは違い、圧倒されることばかりで、自分の発表も課題点は多くありますが、無事に終えることができたことは本当によかったと思っています。

今回、このような貴重な発表の機会を与えてくださいました、天野富美夫教授はじめ国際交流委員会の先生方に厚く御礼申し上げます。



フィラデルフィア美術館の入り口



ロッキー像と私
(映画：ロッキーの舞台地)